様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２３０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００８７７

研究課題名（和文）TAE理論を用いた感受概念の言語化から英語ライティング指導と実践活動を発案する

研究課題名（英文）Designing Practical Activities of English Writing Through Verbalizing Learners' Felt Sense: Adopting the TAE Approach

研究代表者
藤枝　豊（FUJIEDA, Yutaka）

共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・教授

研究者番号：６０４０６２８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、感受概念の言語化手法であるThinking At the Edge理論を応用し、英語ライティング指導と実践活動を発案するための研究基盤の確立を目的とした。本研究で、被験者の英語ライティングの感受概念を言語化し、英語ライティング学習の実体を顕在化した。そして被験者の感受概念から英語ライティング指導の実践活動を提案した。本研究を通じて、被験者は英語で明確に表現することや英単語や言葉遣いの正確に使用する困難さを指摘した一方、英語ライティングの重要性を強調し、英語で書くことを通じて達成感を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　英語ライティング活動の際、書くことへの不安や苛立ちそして喜びといった感情が生じる。学習者の「英語を書くこと」をTAE理論を用いて調査することで、英語ライティングに対する感情面の含意を読み取り、明らかにすることが可能である。第二言語ライティングの研究者が提唱するように、これからは教育環境に適したライティング指導を考え、書く能力を育成することが求められる。英語の伝統的な慣例を忠実に従うライティング指導から脱却するために、ライティング指導を斬新的な方法で生み出す試みを遂げなければならない。本研究成果から、ライティング指導の実践例を生み出し、教育現場へ発信する展開が可能である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to establish a basis for the study of designing practical English writing instruction and activities by applying Thinking At the Edge (TAE) theory, a method for verbalizing sensory concepts. In this study, the research participants' felt sense of English writing was verbalized, and the substance of English writing learning was revealed. Then, I proposed practical writing instruction based on the participants' felt sense of English writing. This study revealed that the participants had difficulties expressing themselves clearly in English and using English words and phrases correctly while writing, whereas they emphasized the importance of English writing and gained a sense of accomplishment through writing in English.

研究分野：英語教授法

キーワード：英語ライティング　英語ライティング指導　感受概念　Thinking At the Edge

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

第二言語ライティングの分野では、第二言語（主に英語）で書くときの感情研究が注目されている。多くの感情・情緒研究は、第二言語習得論の観点から、書き手が異なる言語で書く際に何を感じるのか、その書き手の感情が英語ライティングのパフォーマンスや達成度にどのように影響するかを調査している。ライティングの感情は、情緒的な問題として考えられ、心理的な不安を調べる研究が主に行われており、感情的な要素が書き手のパフォーマンスや正確さにどのような影響を与えるかが調査されている。その他の研究では、第二言語学習者の詩や自伝的ナラティブ（語り）を用いて自分の感情を英語で示す取り組みも行われている。より複雑な感情を探ることで、書き手の自己表現を引き出し、言語的・文化的な使用についての理解を促すことができる。しかしながら、これまでの研究は、学習者の感情を文章レベルから調査した方法論がほとんどであった。感情には複雑な要素が含まれており、テキストに書かれた意味を超えた解釈ができる。そのため、英語学習者が英語で書く際、言葉では表現しにくい感情についてほとんど調査されていない。この「言葉で表現しにくい感情（感受概念）」を調査するために、Thinking At the Edge（TAE）メソッド（Gendlin, 1978; Gendlin & Hendricks, 2004）を質的アプローチとして全体的かつ革新的に適用することができるのではないかと考えた。TAE は、明確に表現することが困難な感情（感受概念＝フェルトセンス）を言語化することや、フェルトセンスの意味を構築するためにも使用することが可能である。本研究は、人の感受概念から、体に暗在する知や感情を、TAE 理論を用いて英語ライティングの指導法を発案する。

２．研究の目的

本研究の目的は、感受概念の言語化を目的とし、(1)英語ライティング学習を顕在化させる、そして(2)上記の研究結果をもとに、英語ライティング指導の在り方と実践活動を発案するための研究基盤の確立をすることである。

本研究は、ライティング活動・経験の振り返りで、感受概念の言語化を目的とし、英語ライティングの指導法の発案をする点に特色がある。まず学習者の英語ライティングに関する感受性や情緒性を言語化し、可視化できる点がある。学習者の英語ライティングに対する不安から、ライティング発達を検証する調査は存在するが、感情は不安だけでなく、苛立ちや喜びを表す。TAE 理論から表現された感情面の含意を読み取ることで、感情の意図を探究し、明らかにすることが可能である。次に英語ライティングに関する感受性を検証することで、英語ライティングに対する負の感情を軽減する様々なライティングの取り組みを考えることが可能である。中等教育と高等教育の英語ライティング活動には差異が生じ、書くことへの不安や緊張が大きい。第二言語ライティングの研究者が提唱するように、今後の英語ライティング教育は、教育環境に適したライティング指導を考え、書く能力を育成することが重要である。英語の伝統的な慣例を忠実に従うライティング指導から脱却するために、日本の英語教育におけるライティング指導を斬新的な方法で生み出す試みを遂げなければならない。本研究からライティング指導の実践例を生み出し、教育現場へそれらを発信する展開が可能であると考える。

３．研究の方法

研究初年度は、主に TAE 理論関連の情報収集と文献調査のまとめ、次年度の研究実施に向けた被験者選出を行った。Gendlin and Hendricks (2004)の論文の精読や TAE ステップ方式を用いたデータ収集法を理解するために、得丸さと子の「ステップ式質的研究–TAE の理論と応用」(2011)と「TAE による文章表現ワークブック」(2008)を閲読した。また研究体制の確立と被験者 17 名

の選出も同時に実施した。さらに、TAE 理論およびステップ式 TAE データ収集法に基づき、徴集した被験者１名を無作為に選び、合意のもとパイロット・スタディも行った。その際、得丸(2008)の worksheet を用いた TAE データは簡易的なものに留め、合計５つの worksheet と個別インタビューを実施した。

令和元年度は、具体的調査を遂行するために、被験者 17 名を対象にデータ収集を行った。しかしながら、コロナウィルスの影響により、対面でのデータ収集が困難となった。少しでもデータ収集を行うために、被験者との予定を確保し、ZOOM を用いたオンラインで workshop を行い、データ収集を開始した。この workshop では、被験者の英語学習履歴とライティング活動経験を理解するために、これらを簡単に日本語で記述させた（記述データ A）。質的研究において、被験者の背景(background) を知ることは、被験者との信頼関係の形成に加え、データを多眼的に分析する上でも価値のある情報資料となるからである。次に TAE による英語ライティングのリフレクション活動を実施した。被験者は得丸(2008)の TAE ワークショップの手順に沿って、合計 8 つの worksheet を順に回答する作業を行った（図１参照）。データは「ウォーミングアップ編」を中心に、(1)マイセンテンスを詩にする（図２参照）、(2)感受概念のパターンを確認、これまでの経験と英語ライティング活動の交差、そして(3)理論化を収集した。全てのデータを収集した後、英語ライティングに関わる感受概念の顕在化と言語化作業を遂行した。TAE によるリフレクション活動の成果は、中等教育と高等教育でのライティング経験を振り返らせるために、英語ライティング経験を通じて気づいたこと、感じたこと、考えたことを振り返らせ、英語ライティングを定義させる作文の記述データを収集した（記述データ B）。TAE 活動の後，具体的な回答を得るため、被験者と記述データ A と B に関する個別インタビューを事前に用意した質問をもとに行われる semi-structured interview（半構造化インタビュー）形式で、年度末に対面で実施した（被験者の許可を得て, IC レコーダーにて録音）。全ての記述データ及び音声データを収集した後、全てのデータを定性調査ソフト「NVivo Pro 11」を使用し、文字おこしを行った。

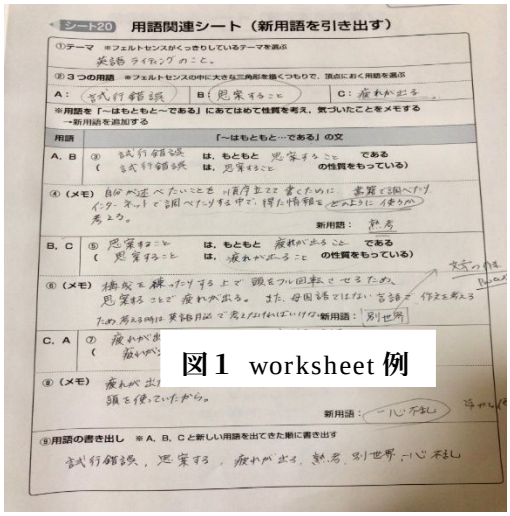

図１ worksheet 例

It looks nice if I can write English well, but writing in English is ***<u>difficult</u>*** *because I am <u>confused with so many expressions</u>*
It looks nice if I can write English well, but writing in English is ***<u>challenging</u>*** *because I am <u>confused with so many expressions</u>*
It looks nice if I can write English well, but writing in English is ***<u>strict</u>*** *because I am <u>confused with so many expressions</u>*

図２　マイセンテンスからの詩

コロナウィルスの影響により、最終年度にデータ分析を行った。本研究のデータ分析は、Steps for Coding and Theorization (SCAT)(大谷, 2016)の解析手法を用いて実施された。SCAT 分析は言語データをセグメント化し, (1)データの中の着目すべき語句, (2)それを言いかえるためのデータ外の語句, (3)それを説明するための語句, (4)そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えて付していく４つのステップコーディングと, (4)のテーマ・構成概念を紡いで, ストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。被験者から得られた記述データ A, B そしてインタビュースクリプトを精読し，マーキングやメモを取った後で SCAT ステップから分析を実施した。音声データは複合的調査手法(data triangulation)で

使用される。

４．研究成果

研究分析の結果、被験者の英語ライティングに関する感受概念を、TAE アプローチから言語化および顕在化することができた。最初の英語ライティングについて感じることを書かせ、それを簡単な文章（マイセンテンス）にしたものを詩にさせるデータでは、比較的、否定的な言葉が多く見ることができた。それから、これらの感受概念をより深く探究するために、SCAT 分析を用いた結果、英語ライティングについて以下のようなテーマを表すことができた（表参照）。

(1)自己表現の難しさ

被験者のほぼ全員が、「英語で表現すること」の困難さを吐露していた。日本語をそのまま英語に訳すことが多く、どの被験者も正確に当てはめようとする努力をしたにも関わらず、英語でうまく表現することの難しさを挙げていた。

(2) 書くことの自信のなさ

(1)から起因しているが、うまく表現できないことから、多くの被験者が英語ライティングへの自信のなさや不安な気持ちを打ち明けていた。何度も書いて、考え、添削を受けてまた書き直す際に湧く感情が、自信ではなく書くことに対する不安や時には嫌悪感を抱きつつ課題に取り組む姿勢が見られた。

(3) 書くことから得られる達成感と自己高揚感

数名の被験者は、上記のような否定的な感情を覚える一方、「外国語である英語」を使って、自分の意見をしっかりと表現すること、または１つ１つの課題に取り組み、少しずつ作品を完成させることで得られる「達成感」という言葉を表していた。また英語を書くことを通じてライティング力の上達を実感した者は、作品を書き始めた頃と比較し、より書くことへの自信へつながる高揚感を得た。

(4) ライティング活動を通じて語学力の向上

ライティング活動は、日本語と英語を使って表現を思考する認知的な作業に加え、考えをまとめて概要を作成するプロセス（過程）を必要とする。こうした一連の作業を行うことで、学習者はライティングを通じて得られる表現方法や、これまで学習した英文構造の復習そして新しい語彙の習得といった語学の習得にもつながることを示唆している。

表：テーマの例

テーマ	Worksheet の抜粋
自己表現の難しさ	“What I felt difficult while writing in English was to change other expressions, not repeating the same words.” “I always felt discouraged because I did not know how to say.”
書くことの自信のなさ	“I am not good at writing in English because I cannot be satisfied with my written texts.” “I used the same patterns of phrases and words in writing, which is boring.”
書くことから得られる達成感と自己高揚感	“When I finish making a paper, I feel a sense of achievement and feel like developing my language skills and absorbing lots of linguistic knowledge.” “I came to be satisfied with my writing in English, and always feel happy when my writing word was over.”

ライティング活動を通じて語学力の向上	“Making efforts on writing leads to a success of developing English.” “I practiced writing in English a lot at university. This will help me learn English further in the future.”

上記の結果から、学習者は英文を書く訓練をする必要があることは当然であるが、まずは「自己表現」から始まるライティングなど、communicative なライティング指導に基づくなど、明確なテーマのもとで指導を行う必要がある。文章が苦手であっても、単なる文法指導に偏った指導になると、結局、伝統的なライティング指導になってしまう。ジャンルに基づいた指導やパラグラフのパターンからライティング表現を学習するなど、授業のゴールを明確に設定した取り組みが重要であることは言うまでもない。また学習者の成果を評価し、ライティング力の向上を可視化する工夫が有効であると考える。ただ作品を書いて終わりではなく、一連のプロセスを経てどのように自分はライティングを進行させたのか、どのようなフィードバックを教員そしてクラスメートからもらったのか、そしてどのように改善に取り組んだのかをわかるようにするべきである。少しの変化や達成感から書くことへのモチベーションに繋がることも期待できる。

本研究から TAE アプローチを用いて、被験者の英語ライティングの感受概念を言語化し顕在化することができた。しかしながら、今回は得丸(2008)のワークシートを参考にデータ収集を行ったが、TAE ステップの初級部分を参考に行ったものである。より具体的で豊富なデータを収集するために、さらにワークシートの活用をすることで、被験者の感受概念の意味を解釈することが可能であると考える。本基盤研究は終了するが、引き続き得られたデータをもとに再分析を行い、成果発表をする所存である。

５．主な発表論文等

[雑誌論文]　（計 5 件）

1. Fujieda, Y. (2020). Emotional studies of second language writing: Focusing and TAE methods. **共愛学園前橋国際大学論集**, 20, 1-13.

2. Fujieda, Y. (2018). A pilot study of emotions of writing in L2: Unpacking the felt sense of an EFL writer. **共愛学園前橋国際大学論集**, 19, 1-18.

[学会発表]　（計 12 件）

1. Fujieda, Y. (2021, March 19-23). *Emotions towards and the meaning of writing in L2: Exploring L2 writers' felt sense* [Paper presentation]. The American Association for Applied Linguistics 2021Virtual Conference.

2. Fujieda, Y. (2020, November 27-29). *Elucidating writers' emotions toward writing in L2* [Paper presentation]. Asia TEFL 2021, KINTEX, Seoul, Korea.

６．研究組織

(1) 研究代表者

研究代表者氏名：藤枝　豊

ローマ字氏名：Yutaka FUJIEDA

所属研究機関名：共愛学園前橋国際大学

部局名：国際社会学部国際社会学科

職名：教授

研究者番号（８桁）：60406288

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 Yutaka Fujieda	４．巻 19
２．論文標題 Complex emotions and sense of writing in English: A case study of three Japanese EFL writers.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 KOTESOL Proceedings 2019	６．最初と最後の頁 61-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yutaka Fujieda	４．巻 20
２．論文標題 Emotional studies of second language writing: Focusing and TAE methods.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 共愛学園前橋国際大学論集	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yutaka Fujieda	４．巻 なし
２．論文標題 Complex emotions and sense of writing in English: A case study of three Japanese EFL writers.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 KOTESOL Proceedings 2019	６．最初と最後の頁 61-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yutaka Fujieda	４．巻 28
２．論文標題 Academic discourse socialization in a research seminar course: A case study of a Japanese undergraduate EFL learner.	５．発行年 2019年
３．雑誌名 The Asian-Pacific Education Researcher	６．最初と最後の頁 93-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s40299-018-0416-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yutaka Fujieda	4．巻 20
2．論文標題 Emotional studies of second language writing: Focusing and TAE methods.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 共愛学園前橋国際大学論集	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yutaka Fujieda	4．巻 19
2．論文標題 A pilot study of emotions of writing in L2: Unpacking the felt sense of an EFL writer.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 共愛学園前橋国際大学論集	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　1件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 Yutaka Fujieda
2．発表標題 Elucidating writers’ emotions toward writing in L2.
3．学会等名 Asia TEFL 2021（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 藤枝　豊
2．発表標題 英語ライティングの感受概念－TAE理論を用いた事例－
3．学会等名 TAEシンポジウム 2021 (ZOOM Online Meeting)
4．発表年 2021年

１．発表者名 Yutaka Fujieda
２．発表標題 Emotions towards and the meaning of writing in L2: Exploring L2 writers’ felt sense.
３．学会等名 The American Association for Applied Linguistics (AAAL) 2021 Virtual Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤枝　豊
２．発表標題 第二言語ライティングの情緒研究－ TAE 理論を用いて－
３．学会等名 TAE シンポジウム 2020（ZOOM Online Meeting）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Yutaka Fujieda
２．発表標題 Elucidating writers’ emotions toward writing in L2
３．学会等名 Asia TEFL 2020 (Online)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 藤枝　豊
２．発表標題 英語ライティングの感受概念－TAE 理論を用いた事例－
３．学会等名 TAE シンポジウム 2021（ZOOM Online Meeting）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yutaka Fujieda
２．発表標題 Emotions towards and the meaning of writing in L2: Exploring L2 writers' felt sense
３．学会等名 American Association for Applied Linguistics (AAAL)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ryuichi Sato & Yutaka Fujieda
２．発表標題 A curriculum analysis of English writing classes in Japanese universities.
３．学会等名 第５８回JACET 全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yutaka Fujieda
２．発表標題 Complex emotions and sense of writing in L2.
３．学会等名 Korea TESOL International Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤枝　豊
２．発表標題 第二言語ライティングの情緒研究－TAE理論を用いて－
３．学会等名 TAEシンポジウム(ZOOM Online Meeting)
４．発表年 2020年

１．発表者名 Yutaka Fujieda
２．発表標題 Emotions towards and the meaning of writing in L2: Exploring L2 writers’ felt sense.
３．学会等名 The American Association for Applied Linguistics（コロナウィルスの影響で学会中止）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 藤枝　豊
２．発表標題 TAE理論を応用した第二言語教育の事例
３．学会等名 TAEシンポジウム2019
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yutaka Fujieda
２．発表標題 Emotions and felt sense of writing in English: A case study of Japanese EFL writers.
３．学会等名 JALT Conference
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yutaka Fujieda
２．発表標題 How do learners’ emotions affect their writing?
３．学会等名 Korea TESOL International Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤枝　豊
２．発表標題 ナラティブと感受概念を用いた第二言語ライティング研究
３．学会等名 第二言語ライティング研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関